

---

## 魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 二次創作 ~

4m

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers〜二次創作〜

### 【コード】

N9096Y

### 【作者名】

4m

### 【あらすじ】

二次創作です

苦手な方はご注意ください

オリジナルの主人公が、訳の分からない世界に来てしまい、戻ろうとあたふたする作品です

なぜ？知らないとするへ

「どせー、こいつがさー」

「はいはいわかったわかった」

いつもと同じ毎日

いつもと同じように学校に行くと、休み時間は大体こいつはこの話だ

「いやさー？CD買おうか迷ってたよね」

「・・・買えばいいんじゃない？」

いつも半分呆れたように俺は答える

最近こいつは気になっているCDを買おうかどうか迷ってるらしい

その理由が・・・

「だってさー、タイトルに少女って入ると変な目で見られそうだし」

「好きならいいじゃん、買っちまえよー」

こいつ曰く、登場キャラは皆大人だけどタイトルに少女がつくから  
決心が・・・だそうだ

「んじゃ、チャイム鳴るからもう行くわ」

そう言って自分の席にもどろろとすると呼び止められた

「これお前にやるよ」

そう言って差し出してきたのは『ストライカーズ』と書かれた単行  
本だった

「今出すなよバカ！」

そう、ここは学校

ということとは他にも生徒がいるわけで、幸いにもバレなかったが危ないところだった

なぜ？知らないところへ（前書き）

投稿のしかたを少し間違ってしまいました

なぜ？知らないところへ

「んじゃ、チャイム鳴るからもう行くわ」

「あ、ちょっと待った」

自分の席に戻ろうと歩き出そうとしたときにふと呼び止められた

「これ、やるよ」

目を戻した時に飛び込んできたのはサブタイトルが『ストライカーズ』と書かれたこいつの本だった

しかもまだ未開封、新品同様だ

「ちょ！お前何やってんの！？」



そう、ここは学校

ということとは他の生徒もいるわけだが幸いにも俺が素早く取り服の下に隠したため騒がれずにすんだ

「まったくお前は・・・」

「悪い悪い、それを特典目当てに二冊買ったから一つお前にやるよ」

「そっさいじつとね・・・」

まったく、ヒヤヒヤさせるぜ・・・

そうして俺は、服の下に本を隠しつつ自分の席に戻るこことなった

「家」

「ただいまー・・・つつても誰もいないか」

俺は一人暮らし

最初は戸惑ったけど慣れればもう住めば都、いろいろと便利なものである

居間の扉を開け中に入る

「よつこらしょっと・・・」

俺は部屋の中央に配置してあるソファーへと腰をおろす

「進路ねえ・・・」

目の前のミニテーブルには、いろいろな大学や専門学校から送られてくる資料やパンフレット

俺ももう高校三年生

なのにまだ進路ははっきりしていない

決められないのだ

「まったく・・・」

そう言いつつも俺はカバンを漁った

すると

「・・・ん？」

何やら、教科書よりも小さな本を見つけた

「ああ、あいつのか……」

それは今日あいつから貰った単行本

教科書に挟まれていたとはいえ、ビニールが剥がれるといったことはなかった

「ふーん……」

俺はビニールを開け中をペラペラとめくった

「なるほどなるほど、魔法ね」

どうやら内容は魔法使いものようだ

最後までページをめくると

「うん？」

何やら小さな紙が落ちてきた

「なんだこれ？」

見てみると大きさは飛行機のチケットくらい

色は珍しく金色で、動かしてみるとキラキラ輝いている

「なるほど、ファンアイテムってやつか？」

それなら納得がいく

「ただ俺は、あいつのおかげで内容はところどころ知ってはいるがファンという程でもない」

「それなら宝の持ち腐れだ」

「・・・捨てとくか」

でもこの本はもう俺のもの、もしかしたらよく単行本に入っているあの紙のようなものなのかもしれない

俺は居間の扉のすぐ下にあるゴミ箱へそのチケットのようなものを丸めて投げた

扉に跳ね返りゴミ箱に入ると思ったが床に落ちてしまった

「まったく・・・」

この手の方法は取りにくいのが面倒である

何回やっても上手くないかない

何かコツがあるんだろうか？

「ん？」

しぶしぶチケットを拾いゴミ箱に捨てようとしたら、扉の向こうからなにやら光が漏れているのが見えた

電気なんかつけたらどうか？

俺はチケットを手に、光の正体を確認するため扉を開け廊下に出た

そして

落ちた



どこだ？見知らぬ街へ（前書き）

ごめんなさい

内容はうる覚えなので間違っていることがあるかと思えます

どこだ？見知らぬ街へ

く???)

「痛い・・・いってー！」

木箱を破壊し、木箱の周りにある小物も派手に飛び散らしながら俺は荒々しく着地した

いや、落ちてきたと言ったほうが正しいだろう

「いってー・・・う・・・うどどだよ」

そこは薄暗い、どこかの街の裏路地だった

人の気配がまったくしない

物が散乱しているだけだ

「と……とりあえずどこかに連絡を……」

俺はジーンズのポケットに手を入れ携帯を取り出した

ん？まて……ジーンズ？

俺は学生服で学校に行つたはずだ

帰ってからも着替えていない

なのになぜ？

よく見ると上着も違つようだ

ここだと暗くてよく見えない

「くそ、明かりはどこだ……？」

周りを見渡してみても照らすようなものはない

不幸なことに俺の携帯にはライト機能がない、待ち受けの明かりでは少々無理がある

それに圏外ときたもんだ

「・・・たく、どうしろってんだよ・・・」

まだ何かないか辺りを見回すと

「あれは・・・いって・・・大通り？」

痛む体を無理やり起こしその方向に目をやると、昏間なのだろうか

見た感じ大きな路地からは街灯とは思えない明かりが感じられた

「とりあえず・・・行ってみるしかない・・・」

行動しなければ何も変わらない、そう自分に言い聞かせ俺は歩き出  
した

「ほんとに何処なんだ？ここ・・・」

俺が暮らしてた街とはまるで違う、見たこともないところだった

それに俺の格好

下はジーパン、上は裏地が赤で表が黒のコート

インナーに白いシャツを着ている

「なんだよ、なんなんだ！」

気がつけば俺は走りだしていた。すべてが夢だと信じたい、そんな  
思いで走っていた

だけどこうなってしまうた以上仕方ない

「そつだよ・・・まずは情報だ」

何事にも情報は不可欠だ

それに走ったおかげで通りにある本屋を見つけることができた

これはもう入って調べるしかない

〈本屋〉

「まったく読めねえ・・・」

入って俺は雑誌コーナーに入った

下手に新聞を読むより、雑誌のほづがわかりやすい

これが俺の考えだ

この世界でもそれは共通だと思い雑誌コーナーに足を向けた

そして金髪美女が表紙の雑誌を手に取りペラペラページをめくった  
まではよかった

よかった・・・のだが

まったく読めないのだ

英語に似ている・・・だが読めないのだ

というかこんな文字の羅列は見たことがない

「どつしたもんかなあ・・・」

半分呆れたように腰に手をあてた

するじ

「・・・ん？」

何やら・・・カチカチと鉄を触っているかのような感覚があった



なんだなんだとそれをホルスターのようなものから取り出してみた

「な・・・！」

俺は叫びそうになったがここは本屋。一般の人もいるわけだ。下手に叫べば注目を集めてしまう。それに今注目されたら大変なことになる

なんで俺は銃なんか持ってんだ？

それも黒塗りのハンドガン

こんな物騒なものを普段から持ち歩くことはない

落ちてきたことと何か関係が・・・？

「ひ……!」

ふと、隣から女の人の声が聞こえた

雑誌を持ったままびくびく震え、その目は俺が持っているハンドガンに向けられている

「ええと……これはその……」

だが、弁解してももう遅かった

「キヤアアアー!!!」

耳をつらぬくような悲鳴

俺はハンドガンホルスターにしまい雑誌を戻すと一目散に本屋をあとにした

弁解せず逃げなければ確実に警察に捕まってしまうていただろう

〜どこかの公園〜

「はあ・・・はあ・・・」

一目散に逃げた結果俺はある公園にたどり着いた

息を整えるためベンチに座る

「もう・・・いったい・・・なんなんだ・・・」

心身共に疲れはて、俺は泣きそうになっていた

変なところに飛ばされるは、服装は変わってるわ、文字は読めないわ、ハンドガンはあるわ、叫べられるわ・・・もう疲れてしまった

「はぁ・・・どうしよう・・・」

頭に手を当て悩んでいると

いきなり周りが歪んだ気がした

「今度は何だよー!!」

俺はもう切れる寸前だった。それに加えて変な歪み。もう何が合っても驚かない

「なんだよ・・・これ・・・」

前言撤回、驚くようなことが起きた

歪みが収まったと思ったなら辺りの風景が気持ち悪いものに変化した

普通の公園が、原型がないまでに

地面の色は赤茶け、公園に生えている木からは赤黒い液体が流れている

「……」

思わず吐き気がした

そりゃそうだ、こんな気持ち悪いもの見たことがない

「グワアアアアー!!」

そんな俺の前に獣のような声をした化けものが生えてきた

そう・・・生えてきたのだ地面から

しかも・・・五体

人形だが足は機械、全身白に赤い線といった鎧のようなもので包まれており、右腕部分にはバカでかい中華包丁のようなものが生えている

俺は本能的に感じとった

もうダメだ・・・と

その中の一体が俺に飛びかかってきた

おそらく一体を突撃させ俺の出方をみるのだろう

もう終わりだ・・・

目を閉じる気力すらない

死ぬ・・・と思ったその時、俺の両手が自然に腰にあるホルスターに回されハンドガンを手に取り相手に向けた

それも・・・二丁

片方は先ほどの黒塗りのハンドガン、もう片方は左のホルスターにあった白塗りのハンドガンだった

さっきは右手を腰に回したため左のには気づかなかったのだ

そして銃を構えると、マシンガン顔負けの連射力でその一体を蜂の巣にした

もうそれは動かない

「え……？え？」

俺もわけがわからない

なんでこんなことができる？

すると今度は残り四体が一斉にかかってきた

これには俺も手を顔の前でクロスさせ衝撃に備えた

だが次の瞬間俺は銃を素早くホルスターに戻すと、手に剣を出現させ向かってきた四体に横殴りするように切り抜いた

四体はまとめてぶっ飛び地面に打ち付けられた

「なんだ……？」

どこからか出現した銀色の剣。日本刀ではなく両刃タイプだった



これを振り抜いたわけだ

「これ・・・どこかで見たような・・・」

必死に考えようとするが今はそれどころではない

四体は起き上がりまた一斉にかかってきた

今度はタイミングをずらし一体が前に、三体がその後ろから襲いかかってきた

「うわ！」

今度こそ終わった・・・そう思ったのだが

頭に浮かんでくる様々な戦術

ここはこう切れればいい、次にハンドガンで撃ち、剣に持ちかえ吹き飛ばすというようなものが沢山浮かんできた

「う・・・うおー！」

俺はまず向かってくる一体を剣ではるか上空に切り上げ、後ろからくる三体を剣が鎌に変化したので横殴りに切り裂いた

次に、切り上げた一体が落ちてきたのでまた二丁拳銃を取り出し蜂の巣にした

落ちてくる一体の残骸

三体も真っ二つにされ動かない

新たにこいつらがでてくることもないようだ

でも、次に問題なのはこの空間

どうやって元に戻るのだろう

「ん？」

空を見てみると、何やらコウモリのようなものがパタパタと飛んでいた

すると、まとも自然に手が動きそのコウモリを銃で撃ち抜いた

撃ち抜いた瞬間周りの空間が歪み、元の公園に戻った

「何なんだよくそ！何なんだ！」

違う世界、歪む空間、戦術、服装、襲いかかってきた敵

考えるだけで頭がパンクしそうだった

「うっうっうっ」

いつの間にか俺はしゃがみこんでいた

目の前が・・・チカチカ・・・

「ちよつと君！？大丈夫！？しっかりして！」

どこからか声が聞こえる・・・

ゆっくり顔を上げると俺と同じくらいの女性が駆け寄ってきていた

だがそこまでしか覚えていない

俺の意識は、そこで途絶えた

いざ！機動六課へ（前書き）

もう一人オリジナルキャラクターの登場です

苦手な方はご注意ください

いざ！機動六課へ

「うーん・・・」

長い眠りから覚めたように、目を覚ました

意識がなくなってからどれだけ時間が経ったか・・・

いや、それよりもここは何処だ？

なんだかこの質問もデジャヴに感じる

とにかく、目の前に広がっているのは空でもなく公園の風景でもない、どこかの一室の天井だった

俺はソファーに横になっており毛布がかけられている

「あ、よかった！気がついた！」

上半身を起こし辺りを見回し最初に飛び込んできたのは、キッチンらしきところで作業している俺と同じくらいの女性、黒髪のロングで顔立ちが整っているとても綺麗な女性の姿と安堵の言葉だった

「はいお水、よっぽど疲れてたんだね。三時間くらい眠ってたよ？」

「ありがとうございます」

俺は素直に水を受け取りそれを飲んだ

ずっと何も、水すら口にせず走り回っていたのでいつもよりもずいぶん美味しく感じられた

「さて、聞きたいことが山ほどあるんだけどいいかな？」

女性は俺の元に近寄りそう言った

「あ・・・はい」

俺は水が入ったコップを目の前のテーブルに置き、女性の質問に従うことにした

「じゃあまず、君はなんで公園で倒れていたのかな？」

「えっと・・・それはその・・・」

いきなり違う世界にやってきて、色々探しまわりながら走りまわったあげく公園で変な奴らを倒したのはいいがショックなことがあるすぎてぶっ倒れましたなんて言えるわけがない

「友達を・・・探して走り回っていたらいきなり目の前がチカチカしたんです・・・」

嘘



全くもって嘘である

とっさに考えて出てきたものだがこれ程ひどいものはないだろう

「・・・嘘だね？」

やっぱりバレてしまった

これでバレないほうがおかしい

「・・・すいません」

「いいのいいの気にしないで、いきなり初対面の人に話せて言われても無理だよな」

すると女性は懐からカードのようなものを取り出し、俺に見せた

「私はシャモニー、シャモニー・ガライヤ。皆からはシャムって呼ばれてる。あ、皆っていうのは私の仕事場の人たち。ほら、ここに書いてある『機動六課』ってとこ」

そう言っつてシャモニーさんは単語を指差す

だがいかんせん俺はこちらの文字が読めないのだ

指差さされてもさっぱりわからない

思わず首を傾げてしまう

「あれ？もしかして文字が読めない？」

そんな俺の様子に気づいたのが、シャモニーさんはそう言っつてきた

「じゃは……もしかして……」

シャモニーさんは考えこんでしまった

この文字はそんなに有名なものなのだろうか？

俺が知らないだけ？

「えっと……君はミッドのどっから辺に住んでるの？」

「ミッド……？ミッドってどこですか？新しい地名ですか？」

俺のこの言葉にシャモニーさんは一瞬驚いた表情をして、次にさっきとはまるで違つとても真面目な表情で俺の両肩に手を置き慎重に話し始めた

「いい？気をしっかりもって聞いてね……？」

「あ、はい……」

そんなシャモニーさんに何も言えず、次の言葉を待った

「君は・・・次元漂流者なんだ」

聞き慣れない言葉だった

じげんひょうりゅうじゃ？

「えっと・・・説明すると、何らかの影響で自分が元いた世界から別の世界に飛ばされちゃった人のことをいうんだ・・・」

俺は何も言葉が出なかった

なるほど、それなら納得がいく

この不思議な世界も、現実離れた現象も、何もかも

俺は恐怖した

もう元の生活・・・世界か、には戻れないんじゃないか・・・

家はどつする？

家族は？友達は？将来は？

もう会うことも、顔を見ることも、話すことすらも出来ないんじゃないだろうか？

そう思うと震えが止まらない

「大丈夫！落ち着いて！まだ帰る方法が無いって決まったわけじゃない！」

「・・・へ？」

まだ可能性は残っている、この言葉に今ほど感謝したことはないだろう

「私達、機動六課の仕事にはそういう人たちをちゃんと元の世界に戻してあげるっていうのも含まれてるんだ。時間は掛かるかもしれないけど見つかるまで絶対諦めないから！」

そう意気込むシャモニーさんはとても頼もしく思えた

「だから文字が読めないのか・・・やっと辻褄が合いました」

そんなシャモニーさんに安心したのか、俺は自然と口が開いた

シャモニーさんは、俺が普通に話し始めたことに安心したのか優しい表情に戻った

先ほどの絶望感も消えて、今は希望があった

「よかったー、あのままおかしくなっちゃうのかと思ったよ」

「シャモニーさんのおかげです」

たしかに、あのまま行ったら俺は確実におかしくなっていた

運よく俺を助けてくれたのがシャモニーさんだったのが救いだっ

「あ、そうだ。ごめんね・・・君が持っていたもの調べさせてもら  
ったんだ」

するとシャモニーさんは俺の持ち物である複数の物を持ってきてテ  
ーブルの上に広げた

携帯電話、多機能型音楽プレイヤー、そして

「これが一番気になったんだけど・・・」

シャモニーさんが持っていたのは二つの銃がしまえるガンホルスター

もちろんあの白と黒の銃も収まっている

「あ！それは・・・！」

「なんでモデルガンなんて持ってるの？間違えれば逮捕されるよ？」

「・・・はい？」

なんだか違うような気がする

たしかにさっきはこの銃で弾丸を撃ちまくっていた

するとシャモニーさんはホルスターから二丁拳銃を取り出し引き金を引いた

止めかけたが、なんとカチカチ音がするだけで何もでない

あれ・・・？



「もう・・・今回は私だったからよかったけど、一歩間違えばどうなっていたか・・・」

シャモニーさんは銃をホルスターにしまい差し出してきた

俺はそれを無言で受けとる

なんで弾が出ないんだ？

「それじゃあ、君がこっちの世界に飛んできたときのことを教えてね？何か怪しいものを持ったり触ったりしなかった？」

「怪しいもの・・・」

俺は必死に考えた、怪しいもの・・・怪しいもの・・・

そして俺は答えにたどり着いた

来たときに持っていて、今は持っていないもの・・・

あわててテーブルの上にあるものを確認したが、それが無い

「シャモニーさん！これの他にありませんでしたか！？俺の持ち物  
！」

「う・・・うん。それ以外には特に無かったけど・・・」

いきなり大声で尋ねた俺にシャモニーさんは驚きながら答えた

ここに無いとしたらあそこしか考えられない

時刻は夕暮れ

暗くなれば探しにくくなる

明日になれば誰かに気づかれるかもしれない

「あ、ちよつと！君！」

俺は考えるより先に部屋を飛び出していた

～裏路地～

シャモニーさんの住んでいたマンションを出て、俺は一目散に最初の裏路地に来た

「チケツト・・・チケツト・・・どこだ！」

必死に辺りの物を投げ飛ばし金色の紙を探す

まだここにあればいいが……

「はぁ……はぁ……何でこんなところに？」

「ここにあるんです！俺のもう一つの持ち物が！」

必死に辺りを探す

手が傷つくのも気にしない

永遠に戻れないよりマシだ

「どこだ……どこだ……あつたー！！」

そして見つけた、木箱の残骸の下敷きになっていたクシャクシャに丸めた金色の紙を

「やつ・・・た」

「ちょっと君！君ー！」

また意識が途絶えた

気がつくと、俺はシャモニーさんに肩を貸されて来た道に戻っていた

「よかった気がついた！ダメだよー、病み上がりなのに無理したら」

「すみません・・・」

俺のポケットにはしっかりとあのチケットが入っていた

これがたった一つの手がかりだった

それからしばらく夕日に照らされた道を歩いていると、シャモニーさんが口を開いた

「明日、機動六課に行くからね？」

「はい？なんでです？」

「次元漂流者の引き取りには、きちんとした書類と保証人が必要なんだ」

たしかに、そうしないと次元漂流者とやらがどこで何をしているかわからないな

ってちょっと待て

「引き取るって・・・誰がですか？」

「うん？私だよ？」

「瞬間が何だかわからなかった」

「引き取る？シャモニーさんが？何で？」

「理由はね、何だかこれからのあなたのことが心配で放っておけなくなっただの、一人で暮らすにしても文字とか読めないでしょ？」

「凶星だ」

「ここで生きていくには情報が足りなさすぎる」

「文字が読めないなんて話にならない」

「・・・でも、迷惑とかかけちゃうかもしれないし、お金とか・・・」

「心配しないで、私は結構お金持ちなのだ！」

そう言って胸をはるシャモニーさん

シャモニーさんが言うには、機動六課というところはとにかく仕事  
がハードで今日みたいに休暇がなかなかとれないので、使わないと  
いうか使えない給料がどんどん貯まっていくのだという

それに加え、命をかけた仕事なので給料がとてもいい

なので今さら家に人が増えたところで特に変わらないという

でも、それでも住まわせてもらっただけというのはなんだか気がひける

しかも女性にだ

だから何か仕事をしようと思いきやシャモニーさんに提案した

「な・・・なら、シャモニーさんがいない間、家の家事炊事は俺が



します！」

これが俺にできる最低限のこと

一人暮らしたたので慣れている

「よし！これで交渉成立だね！」

そう言ってVサインを返してくれたシャモニーさん

「あ、それと・・・私のことはシヤムでいいよ」

「でも、それはさすがにシャモニーさん・・・」

「シヤム」

「いや、ですから・・・」

「シャム」

「シャモニーさん・・・」

「シャム」

「シ・・・シャムさん」

「シャム」

「・・・シャム」

「よるしに..」

そんなやり取りをしている間にいつの間にかマンションに着いていた

たしかにあの部屋は女性の一人暮らしには広すぎる

ルームメイトが欲しかったのかな？

というか、冷静に考えてみたら女性と二人って・・・

しかもとっても綺麗な人と・・・

なんか・・・緊張してきた

「どうしたの？」

「な・・・なんでもないっす！」

そういえば、あの歪む空間のこと話しそびれた

いいか・・・今は余計な心配はかけたくない

「そういえば、君の名前は？」

マンションのエレベーターに乗り込むとシャモニーさ……シャムがそう聞いてきた

そういえば名乗ってなかったなあ

「俺の……名前は……」

そこで俺は思い出した

俺と同じような服を着て、俺と同じような銃を両手に持ち、銀色に光る剣を背負って戦う男の名前を

ここで本名を言うのはまずい

そう思い俺はその男の名前を言うことにした

「・・・ダンテ」

「うん？」

「俺の名前は、ダンテだ」

「そうか・・・これからよろしくね、ダンテ」

本物のダンテのように上手くはいかないけど、俺なりに頑張ってみようと思う

これから新しい生活が始まる

不安と安心が俺を支配していた

潜入！機動六課（前書き）

オリジナルの展開が入ります

苦手な方はご注意を

## 潜入！機動六課

『今日一番悪い運勢は・・・ごめんなさい 座のあなたでした』

「こっちでも朝の占いってやってんだね」

「ダンの世界でも？」

「うん、まあね・・・っていうか本当にそのあだ名になったんですねシャモニーさん」

「ダーニー？シャムって呼んでって言ったよね？あと敬語も」

「ごめん、シャム」

朝、シャム・・・の話によるとシャムの機動六課への出勤時間はとても早いらしい

シャムが先に行き、俺が後で一人機動六課を訪れるということもできるが、地理がわからないので却下

それならば一緒に行こうという話になり早起きして朝食を食べているわけだ

「私は書類を取りに行くからその間・・・そうだ、食堂で待っててね。その方がわかりやすいから」

あのゲームが出来るデバイスもあるでしょ？とシャムは最後に付け加えた

昨日の夜、俺が持っていた多機能型音楽プレイヤーにシャムが興味を持ったので触らせてあげたところ予想以上にハマっていた

俺のハイスコアを一時間で塗り替えされるくらいだ

そのときに、私もシャムって呼ばれてるんだから、私もダンって呼んでいい？と言っていたので、なんだかくすぐったかったがオーケーした

それほどまでにフレンドリーなシャムが俺の世界について詳しく聞いてこないのは、まだこの現実を受け入れきれていないんじゃないかというシャムの優しさだろう



その優しさに、俺はもの凄く感謝してる

『そんなあなたに今日のアドバイスー！それは・・・ズボンにあるポケットに連絡用のデバイスを入れるです！思わぬ人から連絡が来るかもしれませんよー？』

「っていつか俺何気に最下位だなー・・・」

「ダンって 座なんだねー」

いつも最後にやっているアドバイスとやらを実行したことはないが、こんな世界に来てしまったのだ少しは運に頼ってもいいだろう

「あっ、実行するんだ」

「まあ・・・たまにはいいかなってね」

「可愛いところあるんだね」

俺が自分の太もも辺りにあるポケットを見つけ、携帯を入れる仕草にクスクス笑うシャム

その仕草がとても命の現場で働いているとは思えないほどに可愛らしかった

「何？」

「いいや、なんでも。ごちそうさまでした」

その事を悟られないように俺は食器を片付けにキッチンへ行った

ちなみに今日の朝ごはんはシャムの手料理だった

さすが一人で広い部屋に住んでいるためかとても美味しく頂くことができた

ただただ感動するばかりである

「じゃあ、そろそろ時間だから行くよ？用意できたら言っただけ？」

「はい、わかったよー」

俺は昨日与えて貰った部屋に行くに必要な物を準備した

携帯は持った、シャムが言っていた音楽プレイヤーに、一応何かあった時のためにガンホルスターを腰に巻いた

コートで隠れるため普通は見えない

だがシャムが言う『機動六課』で何かあるかわからない。護身用に持つことにした

「ごめんごめん、待たせたね」

部屋から出るとシヤムが扉の前で待っていた

指で何かの鍵をくるくる回しながら

「えっと・・・シヤム、この部屋ってカードキーじゃなかったっけ？」

「え？・・・ああこれ？これは車の鍵だよ？」

・・・車？

「シヤムって・・・車運転出来るの！？」

「うん、そんなに驚くことかな？」

実際、俺の世界で車に人を乗せて怖がらずに運転できるのはだいたい二十歳を越えてからだ

でもシャムは見た目俺と同じ年のようなもの

俺より一つ上だったけど

どれだけ車に乗り慣れてるんだ？

「まあとりあえず行くよー」

シャムのことだ、乗り慣れてるんだからきつと安全運転だろう

そう思い俺はシャムの車がある駐車場へと向かった

〈機動六課駐車場〉

「着いたよー、ダン？」

「う……うお……」

前言撤回、なんなんだこのドライビングテクニックは……

並みの人間じゃあんなスピードは出せないぞ？

それにこの車

明らかにスポーツカーじゃないか！

もはや何でもありなのかこの世界は！

「ダン？鍵閉めちゃうよー？早く降りてー？」

「……はいはい」

なんだか今日の占い、当たってる気がする

〈食堂〉

「じゃあここで待っててね？結構時間かかるからその間に朝ごはん食べに他の職員が来るかもしれないけど怖がらなくて大丈夫だよ、皆いい人たちだから。美人さんも沢山いるよー？」

「・・・はあ」

俺が案内されたのは二人用の席

向かいには多人数用の席がある

ここが人でうまるわけだ

たしかに美味しそうな匂いがする

「はいこれ、私からの奢り。喉渴いたら飲んでね」

そう言って渡されたのは缶ジュースだった

名前は読めないが美味しそうだった

「それじゃねー」

缶ジュースを渡すとシャムは食堂の出口へ歩いて行ってしまった

結構心細かったが仕方がない

「わっ……と」



俺は音楽プレイヤーを取り出して時間を潰すことにした

どれほど時間が経っただろうか

シヤムの言った通り人がだんだんと食堂に集まってきた

最初は皆俺のほうを見るが、たぶん誰かの知り合いだろうと解釈してすぐに目を反らす

初めは俺も戸惑ったが慣れれば気にならなくなった

早くシヤム来ないかなあ・・・

「いや〜お腹空いたよティア〜」

「わかったわかった」

「スバルさん凄いですよねー」

「キユクルー」

出入口に目をやると、朝練でもしたのだろうか？

妙に疲れきった三人の女の子と一人の男の子と小さなドラゴン（ドラゴン！？）が入ってきた

それも男の子と一人の女の子はまだ十歳くらい

なるほど・・・俺と同じく誰かについてきたってわけか

「キャラもエリオも結構動けるようになっただね」

前言撤回、もはやこの世界は何でもありなようです

その後四人は自分たちの朝ごはんを受け取り多人数の席に座った

一人がもの凄い量を受け取っていたがあんなに食べられるのだろうか？

四人は食べ始めるかと思いきや誰かを待っているようだ

席を見るとまだ六人分くらい空いている

一緒に食べる相手がまだ来ていないのだろう

「仲がいいんだなあ・・・」

俺も昼休みにはよく友達と食べたもんだ

そう思い出に浸りながら缶ジュースを飲むとすると

「あちゃー、全部飲んじゃったか・・・」

もうすでに中身は空っぽだった

空の缶ジュースに用はない

俺はゴミ箱を探したが何処にあるかわからない

下手に動けば注目されるだろう

「どつしたもんかな・・・」

考えている最中、缶を持って歩いている職員が目に入った

その職員は四人が座っている席から2〜3メートル離れたところにあるゴミ箱らしき箱にその缶を捨てた

あそこがゴミ箱なわけか

だが捨てに行こうにも下手に動けない

どうしようかと、何気なくその職員を目で追っている。四人の座っていた席がうまっっているのに気がついた

缶を捨てているところを見ているうちに残りのメンバーが来たのだ  
ろう

一人はピンク色の髪をした長いポニーテールの美人さん、一人は長い金髪の美人さん、一人は長い栗色の髪の美人さん、一人は、茶髪のショートヘアの美人さん、そして最後の一人は髪を編んでいる背が低い可愛い子

いやたぶんその髪を編んでいる子は大人だと思っ、背が低いだけで

それにあの金髪美人さん何処かみたような・・・

考えこんでしまいそうだったので俺はとりあえず缶を捨てる方法を  
考えた

そして浮かんだ

ここを動かさず缶をすてる方法

チケットと同じだ

ここから投げて入れればいい

なんだか今日は出来そうな気がする

アドバイスも実行したことだし

ただどこからゴミ箱まで15メートルは離れている

教室の黒板から後ろの壁にあるゴミ箱に投げるより難しいと思う、  
だが注目をなるべく受けずに捨てるにはこれしかないっばい

なんだか本当に出来そうな気がするのだ

そして投げるモーションに入ろうとしたその時

ふと、多人数の席に座っているあの10歳くらいのピンクの髪の女

の子と目があった

俺の姿をみたその女の子は、一体これから何をやるんだろっ?といったような目でこちらを見ていた

どうやら目を反らしてはくれないようだ

俺は決心して、ゴミ箱に狙いを定め缶を放り投げた

缶はきれいな放物線を描きながら、吸い込まれるように見事ゴミ箱に入った

ピンク色の髪の少女に恐る恐るガッツポーズをすると、少女は満面の笑みで俺に向かって拍手をしていた

そんな少女の行動になんだなんだと同じ席に座っていたメンバーたちが問うと、少女は放物線のジェスチャーを交えながら俺がやっていたことを説明していた

説明が終わるとその席に座っていた他のメンバー全員が俺に目を向けた

10歳くらいの男の子と大食い少女はキラキラした目で、オレンジ色の髪の少女と金髪美人と栗色の髪の美人と茶髪のショートヘアは何やら考えるような目で、ピンク色のポニーテールと髪を編んでいる少女？は俺を探るような目で

慌てて俺は目を反らした

もしかして、結構目立ったことをしてしまったのではないだろうか？

「ダン？どうしたの？」

シャムー！！

これで二度目だけど今ほど感謝したことはない！

目の前には、書類を両手で抱え不思議そうに俺を覗きこむシャムがいた

シャムは俺の向かい側にある椅子に座り、テーブルの上に書類を広げた



一方俺は、あの集団がなんとなく気になりちらちら見ていた

あちらもすでに目を反らしているが俺のことが気になるのだろう

同じようにちらちらと俺を見ている

ピンク色のポニーテールの方はずっと俺を睨んでいるが

そんな俺が気になったのかシャムは、一体何をちらちら見ているんだろうと俺の目線の先にある人たちに目を向けた

80

「ああ、あの人たち？あの人たちはね、機動六課の最強部隊の人たちなんだ」

なるほど・・・

「えっと・・・書類のことここに名前書いてね？それで終わりだから、文字はこんな感じ」

と言ってシヤムは、おそろくこちらの文字でダンテと書いてあるであらう一枚の紙を渡してきた

あの人たちから目を反らし俺はそれを見ながら慣れない手つきで名前の欄に書いた

「よし、これでオツケー！これからよろしくね、ダン！」

その言葉に俺は笑顔で答えた

これから新しい生活が始まるのだ

「シヤム、少しいいか？」

俺がシヤムの言葉に答えたその時、隣から女性だかなんだか勇ましい声が聞こえてきた

「シ・・・シグナム副隊長！」

シヤムは俺の隣にいてであろう女性に見事な敬礼をした

俺は恐る恐る隣に立っているであろう女性に目を向けた

そこには・・・さっきまで俺を睨んでいたピンク色のポニーテール  
の人がいた

「ほう、お前は次元漂流者なのか」

「昨日、私が保護しました！」

なんで・・・なぜここにいるんだ？

あのテーブルのメンバーも皆こっち見てるし

「それとお前、ただ者ではないな？」

シヤムから俺に目を戻すと、ピンク色のポニーテールの人はそう言った

「な・・・なぜです？」

「目を見ればわかる、ただ者ではない」

たしかに俺は次元漂流者だけど、そういう意味ではないと思う

俺は女性の雰囲気にもできず、ただ座ることしかできなかった

「それで相談なのだが・・・」

そんな俺の状況などお構い無しに女性は信じられない言葉を口にした

「この後何もなければ・・・手合わせ願えないだろうか？」

俺は一瞬何がなんだかわからなかった

あのテーブルのメンバーも驚いた表情をしている

数人は、あちゃーという顔をしていた

「どつだ？」

どつだつて言われましてもねえ・・・

もしこのまま承諾してしまえば、確実に大変なことになってしまい  
そんな気がする

何が何でも逃げなくては！

俺は何か逃げられる方法を探した

映画みたいにテーブルの下の相手に見えない位置に何かないかなど

そして俺は

太もものポケットにある携帯に気づいた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9096y/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～二次創作～

2011年11月28日07時55分発行